

## メークマ沼へ

加藤多一



冬のメークマ沼へ歩いていってみよう—という思いを、まだ実現していない。

晩秋には、行ってきた。

車道が二km。途中から砂利道にそれて、ゴルフ場わきの道が二km。三年前にはゴルフ場の歩きやすい芝生を横切つて叱られたこともある。

晩秋のときも、湿原に作られた木道をたどる人間はだれもいなかった。冬の今なら、人間の匂いはさらに遠のいているだろう。

へ木道がもつたないし

という声がどこから聞こえてきそう。

これほど奥まで延長しないほうがいい、とは考えるが、私はもつたないとは思わない。逆に、何でも投資効果

率で考えようとする日本人の精神構造に危険を感じる。

企業経営者でもないのにすぐにそれを考える精神は、ほとんどマンガに近い。私はニワトリを飼っているのだけれど、彼等が「エサとタマゴの比率を考えると空腹をガマンすべきだ。殺される順番と日付はどれが一番効率的・能率的だろうか」と考え、競って学習し自己規制している場面を想像する。

オカシクテ笑い、やがて泣けてくる。鉄道も病院も高校の間口も切り捨てられる現実。自然破壊を許す現実。労組合員への恐るべき弾圧の現実。

これらの現実を直視せず、行動しようとしなくて多くの人々の精神は、この感心なニワトリたちの精神と共通しているのではないか。

沼のあたりを歩いていると、いつもこんなことに思いが行ってしまう。

「自然保護協会」ではなく、「自然共生協会」なのではないか、とも考える。

一見すると非生産的・非効率的な夕焼け雲や樹や泥や虫たちや足元ずぶずぶの湿原と共生するのは、人間の特権でもなし、義務でもなし、単に「事実」なのではないか。

水虫や小腸癒着を共生せざるを得ない私という自我と、細胞の中の無数の遺伝子の意志と共生せざるをえない私の体と。

これらとの共生を論じることが批判

することも、生物としての私にはできぬ。もちろん、切り捨て不可能。やってもいいけれど、葬式の準備をしたらだ。うん？。葬式という虚飾の展示会をやるつもりか。

思考がどんどん進んでいくのは、歩行の影響に違いない。

(稚内北星短期大学教授 稚内市在住)